大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

女性の正義/人種の正義：S・ブラウンミラーが論じるエメット・ティル事件を中心に (平木康平教授退職記念号)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 萩原, 弘子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004464

女性の正義／人種の正義

S・ブラウンミラーが論じるエメット・ティル事件を中心に

萩 原 弘 子

2004年5月、事件から約50年の年月を経て、エメット・ティル殺害の再捜査をアメリカの連邦司法省が決めた。今世紀に入ってから、同事件に関する2本のドキュメンタリー映画が製作され、そのなかで新証拠、新証人の存在が指摘されたことが再捜査への契機となったという。[1] その報に接して私が改めて考えてみたいと思ったのが、スーザン・ブラウンミラーが1975年に刊行した著作*Against Our Will*で行なった同事件の位置づけと、それに対して黒人フェミニストから出された批判の意味である。本稿は、エメット・ティル事件をめぐって交わされた性と人種と暴力に関するアメリカ黒人社会での議論とフェミニズム議論をふりかえることから始めて、アメリカのフェミニズムの達成として評価される、ブラウンミラーをはじめとする強姦研究の問題点を明らかにすることをめざす。そうすることで、女性への暴力と対峙するフェミニズム思想・運動の課題のありようを再考できればと思う。

ブラウンミラーの本は2000年に翻訳刊行されている。部分訳というかたちで出されたその邦訳書の構成には、日本におけるアメリカのフェミニズムの受容がどういうものであるかがはっきりと現われているので、それについても考察したい。

エメット・ティル事件の概要

1955年8月、ミシシッピー州タラハチ川で、黒人少年の裸の死体があがった。綿繰り機のタービン（重さ40キロとも70キロとも言われる）をバラ鉄線で首にくくりつけられて沈められていた死体は、頭部を撃たれたうえ、顔面がつぶされていた。さらにそのからだは、殴打と水流のために特定不能なまでに崩れて膨張していた。かろうじて、イニシャル入りの指輪でエメット・ティルと同定された。シカゴ在住で当時14歳であったティルは、夏休みに親戚のいるミシシッピー州マニーに遊びに来ていた。彼にとって初の南部訪問だった。事件は、街の小さな雑貨店で店番をしていた白人女性キャロラン・ブライアントに向かってティルが口笛を吹いたことに始まるとされる。3日後の8月28日深夜、女性の夫ロイ・ブライアントと、彼の父違いの兄J・W・マ

イラムが、ティルのいる大叔父の家にやってきて彼を連れ去った。ブライアントとマイラムは誘拐容疑で逮捕されたが、3日後に死体が発見されたため、殺人容疑で再逮捕される。[2]

ミシシッピー現地での埋葬を急ぐ動きに不信感を抱いたエメットの母メーミ・ティル=モーブリーは、シカゴ市に掛けあって助力を得、なんとか遺体をシカゴまで搬送させる。すでに釘うちされていた棺の蓋を開け、遺体を見た母は、息子が受けた暴力の凄まじさを知る。葬儀は、母の希望で棺の蓋を開けたまま行なわれた。シカゴに本社を置く黒人新聞『ジェット（*Jet*）』は遺体の写真を掲載し、それに次のようなキャプションを付けた。「犠牲となったティルの破壊された顔面には、母親の希望により、葬儀屋は一切の修復を施さなかった。世界中の人々がこの暴虐の証人となってほしいと、母親は言っている」。[3]

9月19日、ブライアントとマイラムの殺人容疑の裁判が始まる。NAACP（黒人地位向上協会）といった黒人組織やUPWA-CIO（アメリカ包装労働者連合・産業組織会議）などの労働組合は、黒人が殺された事件を裁く南部ミシシッピーの法廷で正義が行なわれることはないと見て、連邦レベルからの介入を大統領に要請するが、アイゼンハワーは無視を貫く。まだ人種分離の南部の法廷で、前方の傍聴人席には白人たちが悠々と座し、黒人は後方の壁にはりつくように立って傍聴する様子が、当時のニュース・フィルムで確認できる。法廷審理では、ブライアントたちがティルを連れ去った動機、その後の行動、ティルの死亡時間とその場所といった基本的な事実関係の特定すらされず、証人の反対尋問もないまま、裁判はたちまちのうちに結審となる。5日後の9月23日、12人全員が白人の陪審員はブライアントとマイラムを無罪とする評決を出す。[4] 11月、2人の誘拐容疑に関する審理のために大陪審が召集されるが、被告のブライアントとマイラムも不在の法廷で20分ほどのちには不起訴の決定が出る。

翌年1月24日号の『ルック（*Look*）』誌に、ブライアントとマイラムがティル殺害の具体的な状況を記者に語った記事が掲載された。殺害を認めたところで、すでに無罪の評決が出ている以上、一事不再理の原則により再度裁判にかけられることはないため、4千ドルの対価で記者の求めに応じたものだった。[5]

黒人社会にとってのエメット・ティル事件

裁判の結末も含めて、事件はアメリカの人種的現実と直面することを黒人社会に迫った。この事件をひとつの契機として公民権運動は停滞から再興に転じていく。その仔細を論じるのは本稿の目的ではない。ここではまず、同事件が黒人社会にとってど

ういう意味をもったかを知るために、5人の回想を見ておきたい。

ミシシッピー出身の公民権活動家女性アン・ムーディは、1968年に刊行の自伝で事件をふりかえっている。ティルと同年齢の彼女は、14歳当時、通いの家政婦として白人の家で働いていた。

「主人一家が食事を終え、いつものように居間でテレビを見はじめると、バーク夫人が私を呼んで食事を摂るように言った。私は食器棚からきれいな皿を出してテーブルについた。最初の一口をフォークで口に入れようとしたとき、バーク夫人が台所に入ってきて（中略）私に尋ねた。「14歳の少年がグリーンウッドで殺されたのを知ってるかい？」食べ物が喉に詰まってむせそうになった。「知りません」。（中略）すると夫人が言った。「彼が殺されたのは、分を忘れて白人女性に近づいたからですよ。ミシシッピーの少年ならわかっていたでしょうけど、彼はシカゴから来た子だったからね。北部の黒人は人に対する尊敬というものを知らない。なんでもできると思ってる。ちょいとミシシッピーにやってきて、自分の頭のなかにあることを、ここでそのまんまやらかして、問題を起こしたのさ」。（中略）夫人は台所を出て行った。私は口を開けたままで、食べ物にはまったく手が付いていなかった。たとえ飢えて死にそうだったとしても、食べられなかっただろう。「なにも聞かなかったつもりで、仕事はちゃんとやろう」。そう思って、皿洗いを済ませた。うちに帰ると、木の葉のように震えが止まらなかった。バーク夫人が全力をふりしぼって、このたびはじめて成功したこと、それは私が腐ったゴミみたいな存在だと思い知るようにすることだった。それまでも夫人は、なんとか私に恐怖感をもたせ、私を従属させようと試みてはうまくいかずに諦めていた。しかし夫人がエメット・ティルについて話したときは、その声音の冷たさと恐ろしさが私の全身に襲いかかってきた。」[6]

14歳の家政婦に従属の身分を教えこもうとする白人女主人は、ティルの事件を引き合いに出して、ここぞとばかりに脅してきたのだった。そのときに覚えた恐怖から出発して、ムーディは公民権活動家になっていく。

ケンタッキー州出身のモハメッド・アリは、1975年に刊行した自伝で、まだカシアス・クレイの名で生きていた少年時代の経験として同事件との関わりを記している。

「エメット・ティルは、私と同い歳だった。ミシシッピー州サンフラワー郡で

彼が殺されて1週間後、私は仲間とともに、黒人向け新聞や雑誌に掲載されたティルの写真を街で見て唖然とした。最初の写真では彼は笑っていて幸せそうな顔をしていた。もう1枚の写真では、顔が膨れあがってぼこぼこにされており、眼球はとび出し、口は歪んでつぶれていた。(中略) ティルが私と同年同月同日の生まれと知って、深い絆を感じた。(中略) 彼のことは私の頭から去らず、ついに或る夜、死んだエメットのために白人に仕返しをする方法を思いついた。その夜、こっそり家を出た私は友人のロニー・キングの家まで歩いていき、彼に私の計画を話した。私たちがルイスヴィル、イーストサイド駅に着いたときはすでに夜も更けていた。ポスターが貼ってあったのを覚えている。痩せた白人の男が縞のズボンに山高帽のいでたちで、こちらを指さしている。下のほうに書かれたコピーに「アンクル・サムは君を求めている」とあった。その前で立ち止まって、石を投げてやった。それから靴磨き屋の小屋に押しいり、鉄製の靴置き台を2つ盗みだし、線路まで運んだ。深く埋めてしっかり固定し、私たちは待った。カーブを曲がってきた青く大きなディーゼル車が靴置き台を約30フィートも弾き飛ばして、車輪のひとつが線路をはずれた。枕木の割れるものすごい音がしたのを覚えている。一目散に逃げだした私のあとにロニーが続いた。ふりかえると、ポスターの男がこちらを睨みつけていた。その眼が忘れられない。「アンクル・サムは君を求めている」。現場に行ってみる気力をとりもどすまで2日かかった。行ってみれば、まだ脱線の後始末に人々が働いていた。ポスターの男はあいかわらずこちらを指さしていた。遅かれ早かれ、その男が私のところに来るであろうことはわかっていた。そうなったら、私は正面から対決しようと思った。」[7]

なんとも思いきった「仕返し」ではある。黒人少年クレイがした「仕返し」が列車を脱線させることであったのは示唆的だ。列車は、黒人には手の届かない科学技術や通商取引を意味した。しかしその他方で、列車は移動を意味した。黒人たちは、ジム・クロウの人種隔離によって社会の最下層におしこめられていた南部から、列車に乗って仕事と自由が待つ北部へと移動したのだった。実際エメット・ティルの祖母は、1920年代にまだ2歳のメーミ（エメットの母）を抱いてミシシッピーから北部にやって来た人だ。列車は、北部の工業発展と経済的、社会的自由と、そこへの移動という南部黒人の夢を象徴していた。そして皮肉なことに、北部生まれの14歳のエメット・ティルをはじめてミシシッピーまで運んだのも列車であった。また、クレイ少年が列車を脱線させるために土中に埋めたものが、靴磨き屋の使う靴置き台だったのも示唆

的である。いまでも南部では、靴磨きは黒人の仕事だ。小さな靴置き台が、巨大な列車を止める。この「仕返し」にクレイ少年が込めた怒りは、単に彼ひとりの不満ではなかった。クレイ少年自身が石を投げつけたアンクル・サムとは、むろん米軍の入隊勧誘ポスターに使われた有名なキャラクターで、アメリカ国家を表わす男性である。1960年代後半、すでにネイション・オブ・イスラムに参加してモハメッド・アリとなっていた彼が、ボクサー生命を捨てることも覚悟で、ヴェトナム戦争への徴兵を拒否したことはよく知られている。つまり、後年その男「アンクル・サム」がやって来たとき、アリは拒否した。まだ10代であった彼がアメリカ国家との対決を予感したできごとが、エメット・ティル事件であった。

1985年、アフリカン・アメリカンの作家ジェームズ・ボールドウィンは、亡くなる2年前に出した論集で、事件についてこう記述している。

> 「結局、エメット・ティルが殺された理由としてわれわれが聞かされたことは、通りで（それもしけた田舎町の通りで）彼が口笛を吹いたということだけだ。ただし、彼は、通りがどこよりも危険きわまりない場所になったときに口笛を吹いてしまったのだ。人種分離か、分離を止めるか（「統合」とまではまだ言わなかった）という危機の時代の始まりだった。（中略）南部ではどこの中道派州知事も黒人たちに人種分離を説き、それこそが両人種のためだと言い、合州国大統領はといえば、この事件について一切発言しないことで、人種混合はもってのほか、という立場を雄弁に表明した。」[8]

1964年に公民権法が成立してのちのブラック・パワー運動で思想的リーダーの位置にあったボールドウィンは、後年フランスに居を移してそこで亡くなった。アメリカでは、言論人、芸術家としての自由が保証されないと考えてのことであった。ボールドウィンにとってアメリカは、公民権法があろうとも、南であれ、北であれ、帰ることのない国であった。上記引用で注目しておきたいのは、口笛という小さな行為と「通り」という小さな場所を、南部に留まらないアメリカの50年代という大きな時代状況のなかに置き、それらがどういう政治的意味をもったかを、ボールドウィンらしい犀利な修辞で書いている点である。

ボールドウィンとはおよそ異なる立場の、アフリカン・アメリカン保守派言論人として知られるのがシェルビー・スティールである。彼は多くの場合、アメリカ社会の人種問題の責任をアフリカン・アメリカンにありとし、黒人社会に努力を求めるとい

った発言をする論者である。[9] 犠牲者とされた立場を黒人が「使う」ことに反対するスティールは、アファーマティヴ・アクションのような政策には厳しく批判的である。そんな彼が、1988年のエッセイで自分の少年時代をこう回想している。

「私たちのあいだで、人種の犠牲者として最もよく知られていたのはエメット・ティルであった。(中略) 白人女性を見つめたから、あるいは口笛を吹いたからといった理由で (中略) 殺害され、無惨に遺棄された北部出身の10代の少年だ。(中略) ティルや、ほかの似たようなできごとについて話すなかで、私たちはずっと犠牲者だ、それはまるで塵や砂や水のように、もとから地中にあった変わりようのないものと感じられた。」[10]

エッセイは「黒人でかつ中産階級であることについて」と題されているが、そういう階級的位置にあっても、黒人であれば暴力をこうむる側にあることから逃れられないという恐怖を、ほかの黒人少年たちと共有していたことがわかる。

また、1960年代にジョージア大学初の黒人学生となったことでも知られる女性ジャーナリスト、シャーレーン・ハンター＝ゴールトは1992年の自伝で、次のように事件をふりかえっている。

「私たちの守られた生活に踏みこんでくるようなできごとがときどき起こるようになった。エメット・ティル殺害もそんな事件だった。1955年8月に起こったこの事件に、ほぼ同じ歳ごろだったせいもあって、私たちの目は釘づけになった。おとなの黒人男性がリンチされたのであれば、私たちはあのような感覚はもたなかっただろう。私と一緒に8年生になったばかりのウィルマが言っていた。「こんな子どもが死ぬなんて、はじめて聞いた」。私たちふたりにとって、(中略)『ジェット』紙で見た、ティルのぐしゃぐしゃになった腐乱死体は、ホラー映画以外では見たことのないものだった。少年の水膨れした死体が写るおぞましい灰色の写真を忘れることができない。」[11]

ジム・クロウ法制下の南部で戦後に起きたリンチ事件のなかで、犠牲者が子どもであったことと、その惨殺ぶりを写真がありありと伝えたことで、エメット・ティル事件は、ハンター＝ゴールトの胸に強烈な記憶となって残った。

ラディカル派、保守派、女性、男性の違いはあっても、黒人社会はティルに向けら

れた暴力を人種主義に根ざすものと認識し、わがこととして恐れと怒りを抱いた。エメット・ティル事件は、アメリカ黒人社会の歴史記憶に刻みこまれた重要な人種的経験であった。

スーザン・ブラウンミラーが論じるエメット・ティル事件

スーザン・ブラウンミラーの著作*Against Our Will*（1975年）は、フェミニスト視点に立つ強姦研究の嚆矢とされる。1960年代後半に始まるアメリカの女性解放運動がとりくんだいくつかの重要テーマのひとつが、女性のからだに対する暴力を暴力として認識することであり、暴力をこうむる側である女性に責任ありとするような従来の見方をくつがえすことであった。ブラウンミラーの著作は、強姦を男性の本能的性欲に発する行為と見ることを拒否し、それを権力行使の支配行為であり、暴力であるとした点で、強姦をめぐるさまざまな神話の解体に貢献したと言えよう。ただしそれは、ひとりブラウンミラーだけの達成ではなく、70年代前半に反強姦運動のなかで共有されるようになった認識を、彼女が本に書いただけのことであったと言うほうが正確である。後述する他の強姦研究の著者たちも、奇しくも同年に刊行した書物で強姦に関する同様の見解を示している。

しかしブラウンミラーの本は、「フェミニズム運動が生んだ最も緻密な研究」[12] と『タイム（*Time*）』誌が絶賛するほど緻密なものではない。とりわけ話が人種に及ぶ章では、アフリカン・アメリカンに対する人種的な敵意がむき出しになり、記述はおよそ緻密とは言えない。そもそも強姦研究の本で、強姦事件でも強姦冤罪事件でもないエメット・ティル事件をとりあげることじたいが奇妙であることは指摘しておきたい。事件に関する彼女の記述は、以下のようなものだ。

> 「ティルの行為は子どもじみた悪ふざけという以上のものであり、またその殺害は夫からの復讐という以上のものだった。」[13]

まずこう言って、ティルの口笛と、ブライアントがした殺害行為を並べて、いずれも度を越していたと両成敗にする。そしてこう続ける。

> 「エメット・ティルは、黒人の仲間に、自分は、いや仲間の彼らだって白人女性をものにすることができると教えてやろうとした。キャロラン・ブライアントは手近な標的だった。」[14]

ブラウンミラーは、ティルの口笛を女性に向けられた男性の無礼な欲望表現と読む。ティルの行為は一線を越えたものだと感じた仲間は、大慌てでティルを車に乗せてその場を逃げだす。そして、マイラムとブライアントも、ティルの行為は度を越していると感じた——そこまでを記述するなかで先の両成敗の論理はすでに放棄されている。ブラウンミラーにとって、問題の始まりはティルの口笛のほうである。そしてマイラムの弁を引用する。

「マイラムは、殺人の夜のことを思い起こして、ウィリアム・ブラッドフォード・ヒューイにこう語った。「やつは俺に、白人の女の子の写真を見せたんだ。その子をどうしたとかこうしたとか、大ボラを吹きやがった。俺としては、やることはひとつしかないだろ。これ以上やつを思いあがらせないためさ。」」[15]

ウィリアム・ブラッドフォード・ヒューイとは、無罪評決の翌年に２人から殺害状況を聞きだした『ルック』誌の記者である。ブラウンミラーがマイラムの発言を引用しているのは、彼の人種差別的態度の証拠としてではなく、ティルの不遜な女性観の証拠としてである。無罪評決ののちに金をもらってぬけぬけと惨殺場面を語る殺人者の弁をもって、殺害された側に欠のあったことを示そうというのである。ブラウンミラーの記述は次のように続く。

「ティルが女をひっかけるために吹いた口笛という「思春期らしい」とされる行動はどうだろう。口笛のせいで殺害されるとは驚きだが、それでもわれわれは、エメット・ティルとＪ・Ｗ・マイラムには共通点があることを認めなければならない。２人ともわかっていたことだが、口笛はただのばかげたからかいでもなければ、女の格好のいい足首におくる単なる賛辞でもなかった。（中略）それは身体的な暴行こそ伴わないが、意図的な侮蔑であり、キャロラン・ブライアントに、この黒人少年ティルは心のなかで彼女を我がものにしようとしていると確信させたのである。」[16]

こうしてティルの行動を女性に対する性的所有欲から出た侮蔑であるとブラウンミラーは言明する。ブラウンミラーが挙げる文献から推して、事件に関する彼女の理解は、殺人者が『ルック』誌記者に語った内容に大きく依存しているため、上記の言明は殺人者の見解に近いものとなっている。[17] そして次には、若いときに街なかで口笛を

吹かれた際の自分の態度をふりかえる。かつては反人種差別の体面を保とうとするあまり、はっきりと女性差別反対の態度をとれなかったと考えるブラウンミラーが、そこから確信に満ちたフェミニストになるまでの、いわば思想的軌跡である。

「かつて自分がどう反応したか覚えている。エメット・ティル事件当時、私は20歳。それから15年のあいだ、ニューヨークの通りで、10代の黒人男性から口笛を吹かれたり、性的誘いの言葉をかけられたりしたとき、私は人種平等をめざす同志的微笑のなかでも最良の微笑をもって応えたものだ。神経過敏な白人女性性などはおくびにも出さなかった。（中略）むろん、あの連中が女を誘わないわけがない。彼らの口笛や囁きは、「ファックしていいか？」という以外にどういう意味があろう。しかし、白人女性たるもの、南部の人種差別を是正するという、白人男性の負う責務を同様に負うべきではないのか。私自身のなかにあるこうした疑問を解消して、エメット・ティルが吹いた口笛のもつ侮蔑の意味を理解するには、15年の年月を要した。彼の口笛は、人種的な側面があろうとなかろうと、「おまえをモノにできるぞ」という無礼な挑戦であった。こんにちでは、街で性的なからかいの言葉をかけられると、私のなかに一瞬だが殺意を含む怒りが湧きおこるのである。」[18]

口笛も殺害も度を越していると両成敗するかたちで始まったブラウンミラーの議論は、最後には、口笛の主に対する殺意を肯定して終わっている。

アンジェラ・デイヴィスによる批判

ブラウンミラーのこうした記述に対して、黒人女性から批判の声が挙がる。アンジェラ・デイヴィスとベル・フックスは、早い時期の批判者として重要である。

デイヴィスは、その著*Women, Race, and Class*（1981）の第11章で白人フェミニストが中心になってとりくまれた強姦反対運動を批判的に論じるなかで、ブラウンミラーの著作に言及している。デイヴィスが問題にするのは、白人女性たちが展開する強姦反対運動・思想の底に流れる「黒人男性＝強姦者」という神話の根強さである。ブラウンミラーによるエメット・ティル事件の位置づけも、その神話に支えられているとデイヴィスは論じる。

この２人の論点を、ブラウンミラーは女性としての立場から強姦を問題にしているのに対して、デイヴィスは黒人としての立場から殺人を問題にしていると整理するこ

とはまちがいである。デイヴィスは、ブラウンミラーに対して、強姦よりも殺人、女性よりも人種のほうが重要問題であると批判しているわけではない。

ブラウンミラーのほうはたしかにその種の二元論に立つ。前出の引用中で、15年前には「人種的平等をめざす同志的微笑」で口笛に応えた旨の記述があった。かつて公民権運動組織「人種平等会議（Congress of Racial Equality, CORE）」のメンバーとして活動していたブラウンミラーは、1968年、創設まもない「ニューヨーク・ラディカル女性（New York Radical Women）」運動に参加した。15年前の自分を苦々しくふりかえる先の引用から考えて、ブラウンミラーにとって、女性運動への参加は、いわば「人種の正義」から「女性の正義」、反人種差別から反女性差別（フェミニズム）への大転換であった。ブラウンミラーは２つの正義をあれかこれかの二元論で捉えたうえで、いまは女性の立場でエメット・ティル事件を見られるようになったと言っているのが先の引用である。しかし彼女の考える女性とは、彼女にとって新しい正義となったフェミニズムの視野のなかにいる女性とは、だれだろうか。

デイヴィスがブラウンミラーのフェミニズム、反強姦の思想について指摘するのは、歴史上、黒人女性に対して制度的に行なわれてきた強姦を見ていない点である。奴隷制時代、女性奴隷は常時強姦の恐怖にさらされていた。強姦が性欲を理由とするものでなく、支配行為であることをだれよりもよく知っていたのは女性奴隷たちだ。女性奴隷の強姦は、男性奴隷に無力を教えこむ手段としても機能した。奴隷制が終わると、奴隷制時代には女々しくだめな男とされていた黒人男性についての新しいイメージが登場した。それが白人女性を襲う強姦者というものである。デイヴィスは、「黒人男性＝強姦者」というイメージの形成をあとづけるフレデリック・ダグラスを参照しながら、そのイメージが、黒人女性への抑圧としても働くことを指摘する。黒人男性から相手にされない黒人女性は、彼女に関心を向けるあらゆる男性を歓迎するかのように考えられるため、奴隷制以来のステロタイプであるふしだらな黒人女性という像は強化されるからだ。[19]

以上のように述べてから、デイヴィスは70年代にフェミニズムの重要課題としてとりくまれた反強姦運動に黒人女性が参加しなかった理由を説明している。その運動には黒人女性の経験の場所はなかった。反人種差別の課題を認識しない反強姦の運動に、黒人女性は共感できなかった。家族のなかの男性を、白人女性に対する強姦を口実にリンチされたり、無実の強姦容疑で告発されて投獄されたりすることで奪われるという経験をもつ黒人女性にとって、反強姦の課題は同時に反人種差別の課題でもあるべきものだ。反強姦の運動が「黒人男性＝強姦者」という神話の解体もめざすのでなけ

れば、支配行為である強姦のなんたるかは明らかにならず、反強姦のとりくみとして成果をもたらすこともないだろう。ブラウンミラーが考える女性の正義には、黒人女性の正義は含まれていないと、デイヴィスは見ている。[20]

デイヴィスのこうした批判が向けられるのは、ブラウンミラーの著作だけではない。同年に出され、同じく強姦研究の古典としてよく言及される2つの著作がジーン・マッケラーの*Rape: The Bait and the Trap*（1975）と、ダイアナ・ラッセルの*Politics of Rape, The Victim's Perspective*（1975）である。[21] ブラウンミラーとこの2人に共通するのが、強姦を男性の「本能」といった生物学的本質と結びつけることを批判した点である。そもそも60年代後半に始まったウィメンズ・リブ運動にとって、本質主義の批判は大きな思想的課題であった。議論が集中したのは、性差をどう捉えるかであり、生物学的性差を不動で不変・普遍とする本質主義と批判的に対峙するのがフェミニズムであった。その構築主義的視点は、性差の問題にかぎらず種々の論点に確認できる。では、マッケラーとラッセルがそれぞれに黒人男性と強姦について論じる次の箇所はどうだろう。

> 「黒人はゲットーの厳しい生活のなかで育ち、欲しいものを手にするにはとにかく無理からつかむことを学ぶ。サバイバル・ゲームのルールは暴力だ。そこで女が餌食となる。」[22]

> 「白人女性に対する強姦を復讐の行為、ないしは白人に対する敵意のまっとうな表明の行為と見る黒人男性がいるなら、白人女性のほうも黒人男性を、ほかの男性より信用ならないと見るのは現実的なことだ。」[23]

ゲットーに象徴される貧困が黒人を強姦者にすると言うマッケラー、黒人は人種差別への復讐ないしは白人への敵意から強姦に至ると言うラッセルの言説はいずれも、形式的にはたしかに構築主義的である。しかしデイヴィスは、こうした言説に新手の本質主義を見てとる。かつて道徳によって性をよく律する白人文明の対極に黒人の生物学的自然を置き、貞操観念の欠如と性的放縦を黒人の人種的特徴とする人種主義イデオロギーが力をもったことがあった。現代におけるフェミニストは、黒人男性の性衝動を生得的自然と結びつけることはせず、貧困、人種差別と関連づけている。しかしマッケラーもラッセルも、黒人男性が女性に対する性暴力を犯すとりわけ強い動機を有すると見ている点では、かつての本質主義的人種主義イデオロギーと変わらない。[24]

デイヴィスは、反強姦にとりくむ「女性の正義」に対して、「人種の正義」をもって批判しているのではなく、反強姦の思想・運動の標榜する「女性の正義」には黒人女性の正義が含まれていないことを批判しているのだ。

ベル・フックスによる批判

ベル・フックスは、1981年に刊行の*Ain't I a Woman*のなかで、デイヴィスとは違う視点からブラウンミラー批判を展開している。ブラウンミラーがティルの事件に言及しているのは、第7章「人種の問題」においてである。フックスが批判するのは、ブラウンミラーの書の構成における人種問題の位置である。

> 「ほとんどのアメリカ人が、黒人も含めて、この序例（人種と性別という序列）を認知し受容している。つまりこの序列を、意識的にせよ無意識的にせよ、内面化している。そのため、アメリカ史上いつでも、黒人男性による白人女性の強姦は、黒人／白人男性による黒人女性の強姦よりも重大なものとして注目を集めてきた。女性に向けられる異人種間の性的搾取という危険のなかでも本当に危険なのは、黒人男性による白人の強姦であるという考えを、またまた強化したのがブラウンミラーである。彼女の本のなかでもとりわけ長い章のひとつが、この点に関するものだ。白人男性による先住民女性や黒人女性の強姦に関する章には「アメリカ史についての研究」というタイトルをつけているのに対して、黒人男性による白人女性の強姦に関する章には「人種の問題」とタイトルをつけているのは重要だ。「人種の問題」という章の冒頭で、ブラウンミラーはこう述べている。「人種主義と性差別、そしてその両方との闘い、この3種の闘いが異人種間強姦ではぶつかりあっている。古くからのアメリカに特有のジレンマが交差する当惑の十字路である」。つまりブラウンミラーは、「異人種間強姦」「性差別」といった語を、非白人女性に対する強姦を論じる章では使わないのだ。」[25]

フックスが引用しているブラウンミラーの言葉は、多少の解説が必要だろう。ブラウンミラーの言うジレンマとは、黒人男性による白人女性の強姦が起きると、黒人をかばおうとすると女性を守れず、女性を守ろうとすると黒人をかばえず、つまり人種主義と性差別の両方を同時になくすことができず、どちらに進むこともできないという意味だ。ブラウンミラーにとって異人種間強姦とは、黒人男性による白人女性の強姦だけを指す。フックスはその点を鋭く指摘している。白人男性による非白人女性の

強姦の場合には、人種序列も性的序列も転覆されていないので、人種主義と性差別の両方と闘うことがジレンマにはならず、したがって「人種の問題」ではない。それは単に予測されるとおりの、権力関係内で行なわれる暴力行為にすぎないというわけだ。

ブラウンミラーの強姦研究では非白人女性の経験への言及はあるが、経験の内実が不可視化されるような位置におかれている。それは単に彼女たちの経験に関する記述の欠落ではない。単なる欠落であれば補えばよいということになる。しかしフックスが言うのは、非白人女性の経験を欠落させてこそ、黒人男性による白人女性の強姦を重大なジレンマだとする議論が可能になっているということだ。欠落は補えるものではなく、反強姦の思想として根本的な問題を抱えているというのが、フックスの批判である。

デイヴィスとフックスによる批判はそれぞれに正鵠を得たものであり、白人中心的なフェミニズム思想・運動に対して80年代初期にこうした異議申し立てが起こったことじたいが、アメリカのフェミニズムの豊かさであり力である。

オードレ・ロードの詩と1999年刊のブラウンミラー自伝

1999年にブラウンミラーは、半生をふりかえる自伝を出している。デイヴィスをはじめとする論者の批判が、その後の彼女にどう響いたのか、気になるところである。また99年までには、先にあげた5人の回想にかぎらず、多くの作家、芸術家がエメット・ティル事件に関する作品を書いている。事件は、殺害の不当性と裁判の不当性への怒りに発する芸術表現や、60年代のアフリカン・アメリカン社会が行く道を決めた重要なできごととして位置づける言論を生みだした。よく知られるものに、ラングストン・ヒューズの詩 'The Mississippi—1955' (1955)、グウェンドリン・ブルックスの詩 'The Last Quatrain of the Ballad of Emmett Till' (1963)、トニ・モリスンの小説 *Song of Solomon* (1977) と戯曲 *Dreaming Emmett* (1986)、オードレ・ロードの詩 'Afterimages'などがある。[26] このなかで、ロードの詩には、ティルの「男性としての」行動への言及があり、ブラウンミラーの見解との近似性を見るむきもあるかもしれないので、触れておきたい。

4章にわたるロードの長詩は、エメット・ティル事件当時、北部で21歳であったロードが惨殺死体の写真を見て受けた衝撃と、いまも脳裏に残るその残像をめぐるものである。その第3章はこう謳っている。

「21歳で見たものの残像は彼の破壊された死体／北部の夏の日、街を歩いてい

た／私は目をそらした／どの街角にも写真／新聞、抗議ポスター、雑誌、警察発表、秘密情報、真相／くどいほどの微に入り細に入りの真剣めかした考察やら情報／死んだ少年の下腹部の深い裂け目／悲痛な母の苦しみ／裂断された唇、いくつもの焼痕／とび出た眼球／新聞1面にはりつけられた写真の叫びの生々しさ／（中略）／子どもの血、暴力の快楽／破壊された黒人の肉が写る写真／利用され、ぐしゃぐしゃにされ、捨てられて／歩道に放りだされた肉／それはまるで強姦された女の顔／シカゴから来た黒人少年が／ミシシッピー州ジャクソンの通りで吹いた口笛／そうするのが男だと教えられたことを試みたところ／彼の教師たちは彼の眼球をえぐりだし、性器と舌を切り取り／白人女性性を守るためと称して／重石をつけて彼を川に放りこんだ／意気揚々とジャクソンの街に戻った彼らが／売春宿で祝ったのは／白人男性性を確認する二重の儀式」[27]

女性に向かって口笛を吹くのは「そうするのが男だと教えられたこと」とロードは言い、ティルの行為を男性性と結びつけている。しかしそのあと、男性性の規範が白人男性にあることを言い（「彼の教師たち」）、白人男性性が、白人女性性を守り、黒人男性性を消し去ることで二重に確立されたと続けて、第3章を終えている。第4章でもロードは、キャロラン・ブライアントを「エメットの口笛で侮辱された白人の女」としているが、詩はこう続く。

「彼女は力ある言葉をもたず、結論を下すことも許されず／砕け散った誇りの破片のなかに自信なく立ちすくむ／そして死刑執行者の顔をした男が、彼女をひきずりまわす」[28]

ロードは、口笛も含めて暴力的男性性に批判的だが、彼女が関心を注いでいるのは、ブラウンミラーと違って、白人男性性と黒人男性性の「共通点」ではない。ロードは両者のあいだにある人種的権力関係に関心を注いでいる。白人女性性の独占を前提とする白人男性性が、どれほどの暴力で、身体的存在としての黒人男性性をうちのめし切り刻むかということに焦点をあてているのが、ロードの詩である。だからこそ、徹底した暴力により肉塊となってうち捨てられた黒人男性を、強姦された女にたとえるのだ。そしてロードは、言葉をもたない白人女性に対する白人男性の暴力性も見逃さない。人種と性が相互にからみあって立体化した権力関係の現実に、ロードは関心を注いでいると言えよう。ブラウンミラーは名指されてはいないが、この詩じたいが優

れたブラウンミラー批判となっている。

1975年に*Against Our Will*を出したのちのブラウンミラーは、デイヴィス、フックスによる批判や、ロードほかによる、事件についてのさまざまに豊かな表現をどう受けとめたのだろうか。99年の新著で、エメット・ティル事件に関する75年の記述が批判されたことに触れている箇所がある。ブラウンミラーはどんな批判にも表現にも動かされることはなかったようで、改めてこう書いている。「私が言ったのは、ティルと、彼をリンチした男には共通点があるということだ。それは、白人女性を白人のモノだと見る感覚だ」。[29] 先に見たように、オードレ・ロードもティルの行動が男性規範にもとづくものであったとしているが、彼女はそこから出発して、男性規範をコントロールする白人男性性が、黒人男性を虐殺し、白人女性を押し黙らせるという権力の構造へと分け入った。ブラウンミラーのほうは、四半世紀を経てあいかわらずティルとその殺害者の共通点を言っている。あえて彼女の地平に立ち、彼女の論法を使って、こう言い返してはどうだろう——セクシーな服装をした女性が強姦されて殺された場合、その女性と強姦殺人者は、女を性的対象物と考える点で共通していたと言うのか。

ボブ・ディランが1963年に歌い、91年に改訂した*The Death of Emmett Till*という歌がある。陪審員のなかにティル殺害を幇助した者がいたと歌って、明確な政治性を隠すことのないディランらしい表現だ。ディランの歌は、殺害と裁判の不当に対する告発に続けて、現在に言及している点が重要である。

> 「この種のことは、幽霊のような服を着たあのクー・クラックス・クランを見れば、いまもまだ現実だ。そのことを君に覚えていてほしいから、この歌を歌うんだ。」[30]

ディランの歌は、ブラウンミラーにはどう聞こえるだろうか。彼女は過去の自己弁護をしているつもりだろうが、99年の弁明は、いまだに事件をめぐる不正義がくつがえらないアメリカの現在を弁護していることになろう。

邦訳書の問題

ブラウンミラーの反強姦の思想は、人種という権力関係と性の権力関係がからみあって精緻な暴力の体制をつくっていることを見ようとしない。それが単にエメット・ティル事件に関する記述に留まらないことは、フックスの指摘のとおりである。それは反強姦の思想として根本的な問題点だと考える私は、かつて1997年に書いた論文の

なかで、だれに宛てるでもない要望を出したことがある。当時、ブラウンミラー書の翻訳刊行が準備されつつあるとの話が聞こえてきていたので、刊行に際しては詳細な批判的解題をつけるようにと、論文後注に小さく書きいれておいたのだった。[31]

むろん私のかぼそい声など聞かれるはずもなく、2000年に同書は邦題書名『レイプ——踏みにじられた意思』として解題なしで刊行された。[32] 解題が付かなかったのは予測どおりとしても、目次を見て仰天したのは、12章立ての原著が7章に削られているうえ、削られた5章はいずれもブラウウンミラーの思想的問題点が集中して表われた箇所だったことだ。先にフックスがとりあげていた、第5章「アメリカ史についての2つの研究」と第7章「人種の問題」は訳出されていない。つまり上記で私が引用した、エメット・ティル事件を論じた箇所は邦訳書にはない。そのほかに、第4章「暴動、ポグロム、革命」、第6章「警察記録における強姦」、第11章「被害者——犯罪」もない。いずれも、性の権力関係が人種、民族、階級によって立体化された権力関係のなかで起きた強姦ないしは強姦嫌疑を、ブラウンミラーが平板な性別二元論へと還元することで、複雑な現実に沿う理解を阻んでいる章である。[33] それらの章には、史実の歪曲、資料の恣意的な使用、はっきりと人種主義的な言説など、この書き手に特徴的な問題がよく現われているだけに、ブラウンミラーという書き手を知るうえで不可欠な箇所である。訳者は、「本書の趣旨そのものはこの形でもけっして損なわれていないと信じている」と「訳者あとがき」で言っているが、12章中の5章を削除しても損なわれない「本書の趣旨」とは何か。むろん私は、多くの批判を浴びた問題含みの本を訳すことにも意味はあると思っている。原著をめぐって起きた議論の豊かさには学ぶべきことが多いからだ。しかし、その豊かさを共有できるようにするには、まずはこの本をそのままに日本で紹介するのが翻訳者の仕事であり、出版社の責務であろう。

出版社がこうした削除を決定するその淵源には、日本のフェミニズムの問題があるだろう。つまり人種、民族、階級の権力関係と性の権力関係のアマルガム状態をどう理解するかということが、日本のフェミニズムの課題に入っていないために、それに関わる章をカットしても「本書の趣旨そのものは損なわれない」と判断された。ブラウンミラーと共通する問題を抱えるというのに、日本の読者がその問題に直面する機会は、あらかじめ奪われたことになる。

結論にかえて——再捜査の行方と意味

長年にわたってエメット・ティル事件の再捜査を求めていた母メーミ・ティル＝モーブリーは、2003年に81歳で亡くなった。[34] その翌年、やっと再捜査が決まった。ドキュメンタリー映画製作者をはじめとして、ティル＝モーブリーを支えてきた多くの人が、新証拠、新証人の存在を根拠に連邦政府に働きかけた結果である。新証拠、新証人が出てくるのは、或る意味では当然であった。というのは、事件当時の南部の常として、警察、司法が黒人から話を聞くことはなかったからだ。エメット・ティルと一緒にブライアントの店に行った少年たちはもちろんのこと、ティルの脱げた靴をトラックのそばで見た女性、トラックについた血を洗う男性を見た親子など少なくない目撃者がいたが、黒人は事情聴取すらされなかった。むろん黒人の側にしてみれば、白人に不利な証言をすることは死を意味したので、多くの者は口を閉ざしてきた。映画を撮ったネルソンとボーシャンは、それぞれに新証人から新証言を引きだしている。誘拐殺害の中心にいたブライアントとマイラムはすでに物故しているが、事件が2人だけの犯行ではなく、2人を助けた人物が何人もいて、なかには生存者もいることが明らかになり、司法省を動かした。

しかし真相が見えてくると、1950年代南部の闇の深さもわかってくる。というのは、ブライアントとマイラムの犯行を助けたなかに黒人男性がいたという証言があるからだ。圧倒的な権力関係のなかで、連行と殺害の手下としてブライアントとマイラムに使われた黒人はひとりならずいた。その人数については諸説あるが、ボーシャンは、実行犯が全部で14人、そのうち黒人は5人、また現在の生存者は5人としている。[35] ブライアントとマイラム2人だけの仕業ではないことは、実は1955年の事件当時、北部の黒人記者ジェームズ・ヒックスによる記事のなかでも指摘されていた。[36] 日ごろからブライアントとマイラムの下で働くことの多かった黒人男性ヘンリー・ロギンスとリーロイ・コリンズが、裁判直前になって突然刑務所に入れられたことをつきとめたヒックス記者は、郡保安官による証拠隠滅と見て、自身の生命も危険にさらしながら取材している。家族に同行して刑務所に面会に行こうとしても、綿花プランテーションで働く彼らが、綿摘みの繁忙期にある9月にその仕事を休んで面会に行くことは事実上不可能だった。ヒックスは、接触した現地の黒人たちのなかに、匿名を望む者、しゃべると鞭打ちをくらうからと怯える者がいたことを記している。結局、証言する覚悟もあったと言われるコリンズは行方がわからなくなり、法廷で証言することはなかった。警察、司法が証拠隠滅に関与していることを、ヒックスは確信した。[37]

結審から2週間後に出たヒックスの記事の価値が認められるには、半世紀の年月を要したことになる。コリンズはすでに亡くなっているが、存命で80代のロギンスはボーシャンのドキュメンタリーに登場し、事件への関与を否定する発言をしている。1955年のヒックスの記事が当時のミシシッピーの黒人を抑えつけていたジム・クロウ下の緊張と恐怖を伝えているのは当然としても、衝撃的なのは、2003年、2004年に製作されたネルソンとボーシャンのドキュメンタリーでも覆面で語る黒人たちがいることだ。ジム・クロウの亡霊は現代もまだ去らず、それを反映してか、再捜査の進展ははかばかしくない。口笛を吹かれたとされるキャロラン・ブライアントは、その後ブライアントとは離婚して、現在もミシシッピーに暮らしている。ティルを連行したトラックに彼女も乗っていたと言う目撃者もあり、事実を知る存命の証言者として重要な人物だが、再捜査への協力は拒否している。[38]

2005年6月、捜査再開から6年ののちにミシシッピーの法廷で有罪評決が出された別の殺人事件がある。「ミシシッピー・バーニング事件」、略して一般に「ミバーン事件」と呼ばれるできごとだ。[39] 41年前に殺害されたのは黒人1人を含む3人の活動家で、公民権組織COREのメンバーであった。1964年の夏、COREとSNCC（非暴力学生連帯委員会）が組織した「フリーダム・サマー」キャンペーンで、黒人有権者に選挙人名簿登録を促すボランティアとして働いていた青年たちだ。（ちなみに、若き日のブラウンミラーもCOREのメンバーとして同キャンペーンのためにニューヨークからミシシッピーにやって来て活動していた。）事件から2週間後、3人の死体はまだ発見されていなかったが、連邦政府は事件に促されるかっこうで公民権法制定を決めた。このたび60年の禁固刑を言い渡された80歳の被告エドガー・キレンはＫＫＫメンバーである。1964年の事件後、67年に公民権侵害の罪で起訴されたものの、陪審員たちが評決に達することができなかったため釈放となっていた。殺人罪での裁判は今回が初めてだった。求刑どおりの評決が出たとはいえ、キレンは60万ドルの保釈金でただちに自由の身となった。保釈金を出したKKKは、法廷前でキレンを称える儀式を行なっている。[40]

エメット・ティル事件の再捜査の行方も楽観できない。1955年のアイゼンハワー以来、9人の大統領（うち民主党の大統領4人）が無視を決めこんでいた事件に、いま、Ｇ・Ｗ・ブッシュという、公民権確立に熱心とは到底言えない大統領のもとで再審への道が開けたのは、考えてみれば奇妙ではないか。ティルの事件と上記のミバーン事件以外にも、数十年もの時を経て再審が進んだ公民権関連事件がある。[41] また、2005年には、連邦議会上院は、過去にリンチを禁止する法律を制定しなかったことを犠牲者

に謝罪する決議を採択した。連邦レベルでのリンチ禁止法案は100年前から200もの提案が出されてきたが、上院を通ったものはなかったのである。こうして過去の不正義が正されることは、とりあえず喜ばしいとは思う。しかし或る上院議員がそれを「国内のテロリズム」と闘うためだとする発言を聞くと、公民権の確立と擁護とは別の政治文脈がつくられつつあるのではと思う。[42] 2001年9月11日のできごとを契機に「正義の戦争」をアメリカが強行している状況下で、国内少数者に対する長年の不正義が正されないままでは戦争の正義も支持されないという危機感が連邦政府にあるのはまちがいないだろう。「反テロリズム」を正義とする以上、「国内のテロリズム」も許さないという姿勢を示すなかで、ジム・クロウ下の人種主義的暴力を「テロリズム」と定義しなおしていくというのが、現在進んでいる過程ではないか。つまり、惨殺された黒人少年の正義が、帝国の正義の確立に利用されかねないというのが、正義をめぐる現在の権力関係の構図だと私は見ている。その構図のなかでは、不正義を正すことに抵抗する点で、キレンからブラウンミラーまでの距離はそう遠くない。もちろん、帝国の正義として断行される戦争には、強姦を阻止する正義の場所はない。

註

1 *The Murder of Emmett Till*, PBS documentary directed by Stanley Nelson, 2003; *The Untold Story of Emmett Till*, documentary film directed by Keith A. Beauchamp, 2004.

2 Ibid.

3 Quoted in Elizabeth Alexander, 'Can you be Black and Look at This?' in Thelma Golden (ed), *Black Male*, New York: Whitney Museum of American Art, 1994, p.102.

4 Beauchamp's film, op.cit.

5 William Bradford Huie, 'The Shocking Story of Approved Killing in Mississippi,' *Look*, January 24, 1956, pp.46-50. see <http://www/emmetttillmurder.com/index.htm> visited 2007/12/16.

6 Anne Moody, *Coming of Age in Mississippi*, New York: The Dial Press, 1968, p.104.

7 Muhammad Ali, *The Greatest*, New York: Random House, 1975, pp.34-35. 実際にはアリとティルは同年同月同日生まれではない。アリは1942年1月17日生まれ、ティルは1941年7月25日生まれ。

8 James Baldwin, *The Evidence of Things not Seen*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1985, pp.40-41.

9 スティールのそうした立場は、邦訳もされている次の本によく表われている。Shelby Steele, *The Content of Our Character: A New Vision of Race in America*, 1990.（シェルビー・スティール『黒い憂鬱—90年代アメリカの新しい人種関係』五月書房、1994年）

10 Shelby Steele, 'On Being Black and Middle-Class,' *Commentary*, January 1988, p.43.

11 Charlayne Hunter-Gault, *In My Place*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1992, pp.116-117.

12 *Time*, vol.107, no.1, January 5, 1976, p.20.

13 Susan Brownmiller, *Against Our Will: Men, Women and Rape*, first published 1975, Harmondsworth: Penguin Books, 1976, p.247.

14 Ibid., p.247.

15 Ibid., p.247.

16 Ibid., p.247.

17 Ibid., p.431.

18 Ibid., pp.247-248.

19 Angela Davis, *Women, Race, and Class*, first published 1981, New York: Vintage Books, 1983, p.182.

20 Ibid., pp.175-177.

21 Jean MacKellar, *Rape:The Bait and the Trap*, New York: Crown Publishers, 1975（ジーン・マックウェラー『レイプ《強姦》——異常社会の研究』現代史出版会、1976年）; Diana Russell, *The Politics of Rape, The Victim's Perspective*, New York: Stein & Day, 1975.

22 MacKellar, op.cit., p.72.

23 Russell, op.cit., p.163.

24 Davis, op.cit., p.181.

25 bell hooks, *Ain't I a Woman: Black Women and Feminism*, first published 1981, London: Pluto Press, 1982, p.53.

26 Langston Hughes, 'The Mississippi—1955,' 1955; Gwendlyn Brooks, 'The Last Quatrain of the Ballad of Emmett Till,' in *The Selected Poems*, 1963; Toni Morrison, *Song of Solomon*, 1977（トニ・モリスン『ソロモンの歌』早川書房、1980年）; Morrison, *Dreaming Emmett*, 1986; Audre Lorde, 'Afterimages,' in *The Collected Poems of Audre Lorde*, 1997. 最後のロードの詩は、1992年に彼女が亡くなったあ

とに刊行されており、正確な制作年は不明。

エメット・ティル事件に関わる詩や小説などについては、次の本ならびにウェブサイトを参照。Clenora Hudson-Weems, *Emmett Till: Sacrificial Lamb of the Civil Rights Movement*, Troy, Michigan: Bedford Publishers, 1994;
<http://www.emmetttillmurder.com/index.htm>

27 Lorde, op.cit.
<http://www.poetryfoundation.org/archive/poem.html?id=17290>visited 2007/12/14.

28 Ibid.

29 Susan Brownmiller, *In Our Time—Memoir of a Revolution*, New York: The Dial Press, 1999, p.248.

30 <http://www.bobdylan.com/songs/emmetttill.html> visited 2007/12/13.

31 萩原弘子「黒人男性性——黒人フェミニストの視点」『現代思想』1997年10月号、p.225。

32 スーザン・ブラウンミラー『レイプ——踏みにじられた意思』勁草書房、2000年。

33 たとえば、「黒人に対する暴徒の暴力：ＫＫＫ」と題する節でＫＫＫによる黒人女性の強姦を論じたのに続けて、「白人に対する暴徒の暴力：コンゴ動乱」と題する節を置き、60年代初期のコンゴ独立直後に起きたアフリカ人兵士による白人女性の強姦を論じている。これら２節は、同じ言葉遣いのタイトルを並べることで、読み手に「白人もやった、黒人もやった」という印象を与えている。しかしアメリカにおける黒人女性の強姦は、奴隷解放後のＫＫＫに限るものではない。また、コンゴ動乱時の強姦については、独立したコンゴをひきつづき支配下に置くことを望んだベルギー王室によるプロパガンダ文書を無批判に、しかも孫引きで使用していて、幾重にも人種主義的で信頼できない記述が続く。この節でも彼女は、男性優位の暴力性を確認することに終始し、アフリカ人も男性特権として女を強姦するに及んだのであり、女性を所有物と考える点でいずこの男性も同じであるという趣旨の記述で終わっている。(p.139)

34 メーミ・ティル＝モーブリーは亡くなる年に自伝を刊行している。Mamie Till-Mobley, Christopher Benson, *Death of Innocence: The Story of the Hate Crime that Changed America*, One World Books, 2003.

35 Keith Beauchamp interviewed by Democratic Now on June 15, 2005.
<http://www.democraticnow.org/2005/6/15/the_untold_story_of_emmett_louis> visited 2007/12/16.

36 James L. Hicks, 'They Stand Accused,' *Cleveland Call and Post*, October 8, 15, 22, 1955. ヒックスの記事をはじめ、重要な関連文献の資料集として次の本がある。Christopher Metress, *The Lynching of Emmett Till*, Charlottesville: University of Virginia Press, 2002. また同じメトレスによる次のURLも参照。
<http://www.archipelago.org/vol8-2/metress.htm>

37 Hicks, op.cit.

38 'Investigation into 1955—Emmett Till Slaying Focusing on Woman He Allegedly Whistled at,' *The Miami Herald*, October 25, 2004.

39 映画『ミシシッピー・バーニング』(1988年) はこの事件を下敷きとしている。

40 Beauchamp interviewed by Democratic Now on August 26, 2005.
<http://www.democraticnow.org/2005/8/26/50_years_after_the_murder_of> visited 2007/12/17.

41 G・W・ブッシュ政権下で再審が進んだ公民権関連の事件として、1963年アラバマ州バーミングハムで4人の少女の命を奪った黒人教会爆破事件がある。2002年、実行犯KKKメンバー3人のうち、最後の生き残りであったボビー・チェリーに終身刑の評決が出された。服役したチェリーは、2004年、74歳で刑務所で死亡した。

42 上院議員メアリー・ランドリュー (ルイジアナ州選出、民主党) の発言。
<http://www.usatoday.com/news/washington/2005-06-13-senate-lynching_x.htm>
visited 2007/12/19.